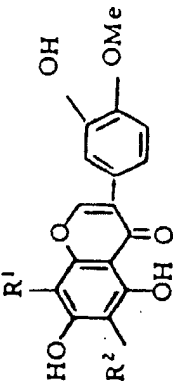
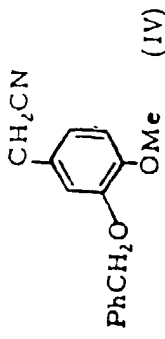


<p>02698X/02 802 MICROBIAL CHEM RES INST 25.01.74-JA-010092 (11.08.75) A61k C07d Isoflavone derivs - prepd from iretol and 3-benzoyloxy-4-methoxyphenyl acetonitrile</p>	<p>ZAID 25.01.74 *J5 0101-360</p>	<p>5, 7, 3'-Trihydroxy-6, 4'-dimethoxyisoflavone (I) and 5, 7, 3'-trihydroxy-8, 4'-dimethoxyisoflavone (II) are prepd. by reaction of iretol (III) with 3-benzoyloxy-4-methoxyphenyl-acetonitrile (IV) in the presence of Lewis acid catalyst, condensation of resulting 2, 4, 6, 3'-tetrahydroxy-3, 4'-dimethoxydeoxybenzoin (V) with ClCOCO₂Et, hydrolysis of the resulting mixt. of 5, 7, 3'-trihydroxy-6, 4'-dimethoxy-2-carboethoxyisoflavone (VI) and 5, 7, 3'-trihydroxy-8, 4'-dimethoxy-2-carboethoxyisoflavone (VII), and ecarboxylation. (I) and (II) inhibit catechol-O-methyltransferase.</p>	<p>B6-A1, B12-G1.</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="text-align: center;">  <p>(I: R¹ = H, R² = OMe II: R¹ = OMe, R² = H)</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>(IV)</p> </div> </div> <p>Thus, HCl was introduced to a mixt. of (II) 1.5, (IV) 3.0, and ZnCl₂ 2 g in Et₂O at room temp. and the reaction product heated in H₂O 1 hr. to give 50% (V). Stirring 1.5 g (V) in C₆H₅N with 3.6 g ClCOCO₂Et 20 hr. at room temp. to give 519 mg a mixt. of (VI) and (VII). The mixt. (319 mg) in EtOH was refluxed 5% aq. Na₂CO₃ 10 min. and the reaction product heated 7 min. at 280-310°C and 4 mm Hg to give 290 mg a sublimate giving (I) and (II).</p>
---	--	--	---



特許庁
(2000円)

特

許

公

第

号

昭和49年1月25日

特許庁長官殿

1. 発明の名称 新規イソフラボン誘導体
その製造法

2. 発明者
住所 東京都板橋区豊玉北4丁目2番2号

氏名 橋 次 良 夫 外3名

3. 特許出願人
住所 東京都品川区上大崎3丁目14番23号

名称 財団法人衛生化学研究所

代 理 人 市 川 純 二

4. 代理人
住所 〒105 東京都港区西新橋1丁目2番9号
三井物産館内 電話(591)0261番
(2400) 氏名 金 丸 義 男 外4名
40-010092

明 細 書

1. 発明の名称

新規イソフラボン誘導体の製造法

2. 発明の要旨

イレトールと3-ベンジルオキシ-4-メトキシフェニルアセトエトリルをルイス酸触媒の存在下に反応させ2, 4, 6, 3'-トリヒドロキシ-5, 7, 4'-ジメトキシベンゾインを生じ、ついでこれにエチルクロルグリコザレートを経合して5, 7, 3'-トリヒドロキシ-6, 4'-ジメトキシ-2-カルボエトキシイソフラボンと5, 7, 3'-トリヒドロキシ-8, 4'-ジメトキシ-2-カルボエトキシイソフラボンとの混合物を得た後、これら化合物を加水分解ついで脱炭酸させることを特徴とする、5, 7, 3'-トリヒドロキシ-6, 4'-ジメトキシイソフラボンおよび5, 7, 3'-トリヒドロキシ-8, 4'-ジメトキシイソフラボンの製造法。

3. 発明の詳細な説明

本発明は空速活性を有する新規化合物の製造法

① 日本国特許庁

公開特許公報

① 特開昭 50-101360

③ 公開日 昭50.(1975) 8.11

② 特願昭 49-10092

② 出願日 昭49.(1974) 1.25

審査請求 未請求 (全5頁)

片内整理番号

6910 44

7169 44

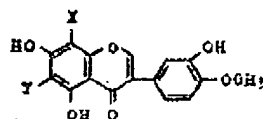
② 日本分類

16 E21
30 B0

⑤ Int. Cl.

C07D311/36H
A61K 31/35t

に關するものである。特に下記の一般式(1)式で示される新規化合物5, 7, 3'-トリヒドロキシ-6, 4'-ジメトキシイソフラボン(化合物1)および5, 7, 3'-トリヒドロキシ-8, 4'-ジメトキシイソフラボン(化合物2)の製造法に關するものである。



(1)

化合物1: X = H, Y = OCH₃

化合物2: X = OCH₃, Y = H

上記構造式で示されるイソフラボン誘導体は本発明者らが尿系阻害物質を微生物代謝産物中に見出すという一連のスクリーニングの過程においてアクチノマイセス・ロゼオルス(Actinomyces roseolus)の培養液および菌体から見出したものでカテコール-O-メチルトランスフェラーゼ(COMT)を著しく阻害する興味ある物質である。

すなわちCOMTの阻害剤は外部より注入されたアドレナリン、ノルアドレナリン等の消失速度を遅らせ、アドレナリン、ノルアドレナリンによる血圧上昇の延長及び増強作用を有する事が報告され、又この阻害剤には内在のカテコールアミン類の減少によつて起るとされているうつ病などの病気の治療剤となる可能性が考えられる。さらに分裂病の病因は種々いわれているがその一つに生体アミンの異常メタル化物(カテコールアミン、セロトニンのメタル化物)が脳内に産生することが原因であると云う仮説があり、特に分裂病等における幻覚症状の発現はカテコールアミン類の異常メタル化物によつて起ると空われている(文献、H.E. Himwich 氏、Amines and Schizophrenia, 1967年, Pergamon Press, Oxford)。そこでCOMTの阻害剤は分裂病及びその幻覚症状の治療剤としての可能性が考えられる。またインフラボン類の抗凝血作用が付因、動物によつて報告され(Agr. Biol. Chem. Vol. 32, 頁6, 748~749, 1968)、さらにコレステロールの付着

-3-

があるばかりでなく生産能率も著しく低いものである。すなわち本発明者らはこの種化合物を入手容易な化合物から有機合成的に製造する方法を確立すべく鋭意検討した結果、ここに示される生産活性を有する上記インフラボン化合物の合成法の開発に成功した。

即ち本発明はイレトール(化合物3)と3-ベンジルオキシ-4-メトキシフェニルアセトニトリル(化合物4)とをルイス酸触媒の存在下にフリーデルクラフト反応させ、4,6,8-トリヒドロキシ-5,4'-ジメトキシベンゾキシベンゾイン(化合物5)を生成し、ついでこれにエタノールグリセリネを混合させ、これと同時に脱水反応を起させることにより5,7,8-トリヒドロキシ-6,4'-ジメトキシ-2-カルボエトキシインフラボン(化合物6)および5,7,8-トリヒドロキシ-6,4'-ジメトキシ-2-カルボエトキシインフラボン(化合物7)の混合物を得た後、ついで該化合物6および7のエステル基を加水分解して5,7,8-トリヒドロ

-5-

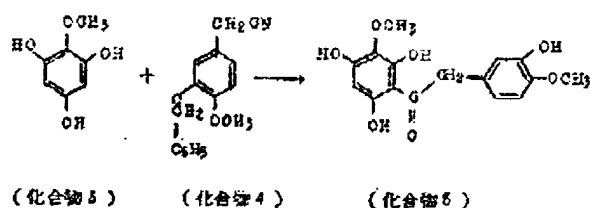
を防ぐ事がモールス、モローらによつて報告されている(G.W. Hoersch 氏、J. Med. Chem. 10 (2), 154~158, 1967)、また本発明者らは先にドーパ脱炭酸酵素阻害を化合物1および2について検討し、著しい阻害効果があることを確認し、高血圧自然発症ラットに投与した時、その血圧を低下させる事を発見した。これらの事より化合物1および2が高血圧症及び動脈硬化症などの病気の治療剤としての可能性又パーキンソンニスムス症のドーパでの治療に際して補助剤となり得る可能性などが期待される(A. Plotecher: Abstracts, Fourth International Meeting of the International Society for Neurochemistry (Tokyo), 1964 (1973); 及び M.D. Muentzer 氏、同誌 p. 109 (1973))。

さらに本発明者らは化合物1がヒスタジン脱炭酸酵素を阻害する事を発見しているがこの事は人の長症及びアレルギー症の治療剤としての可能性も考えられる。しかしながら天然から得られる上記一般式(I)のインフラボン化合物は生産量に限り

-4-

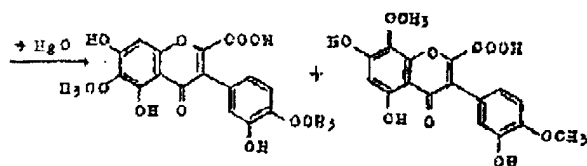
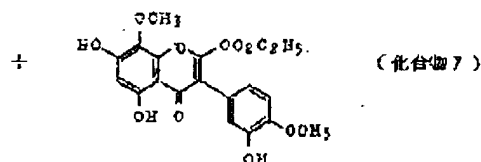
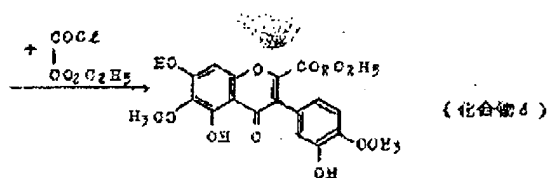
キシ-6,4'-ジメトキシ-2-カルボキシインフラボン(化合物8)および5,7,8-トリヒドロキシ-6,4'-ジメトキシ-2-カルボキシインフラボン(化合物9)を生成し、これら化合物8および9を脱炭酸させることを特徴とする新規生産活性インフラボン化合物、5,7,8-トリヒドロキシ-6,4'-ジメトキシインフラボン(化合物1)および5,7,8-トリヒドロキシ-6,4'-ジメトキシインフラボン(化合物2)の製造法を提供するものである。

本発明の方法を反応式で示せば次の通りである。



-550-

-6-

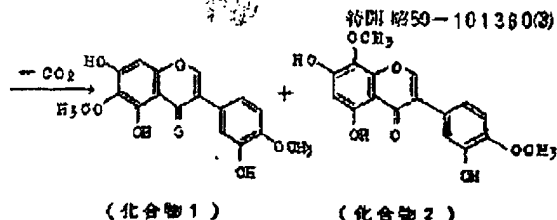


(化合物 8) (化合物 9)

-7-

えられる。反応後はデオキシベンゾイン（化合物 5）が通常の有機化学的手段（例えばクロマトグラフィ）によつて分離精製される。ついで第 2 工程の新合成化反応は下記のようにして行なわれる。すなわち第 1 工程で得られたデオキシベンゾイン（化合物 5）をピリジンに溶かしエチルグリオキサレート（oleocooEt）と反応させる。反応はかくはん下に 10～30 時間行なう。反応温度は 10～100℃で好ましくは 20～40℃で行なう。エチルグリオキサレートはデオキシベンゾイン（化合物 5）に対して過剰に好ましくは 2～3 倍量用いられる。反応後は通常の有機化学的処理を経てすなわちクロマトグラフィにて適合酸化生成物 6 および 7 が単離精製される。

本発明の方法の第 3 工程は第 2 工程で得られたイソフラボンカルボン酸エチルエステル（化合物 6 および 7）を混合物のまま加水分解ついで加熱脱炭酸することからなつてゐる。エステル（化合物 6 および 7）の加水分解は通常の方法に従ひ通常実施される。本発明方法においては希アルカリ



本発明の方法の第 1 工程のフリーデルクラフト反応は通常の反応における条件に順じて常法で実施される。つまりイネオール（化合物 3）とフェニルアセトニトリル（化合物 4）を通常のフリーデルクラフト反応において用いられる有機溶媒に溶かし、ルイス酸を加えて反応を行なう。有機溶媒としてはエーテル、ベンゼン、トルエンなどが好ましく用いられる。触媒のルイス酸としては金属塩特に塩化亜鉛が好ましく、塩酸存在下にあるいは塩酸ガスを通じながら反応を行なう。反応温度は 10～120℃であるいは溶媒の沸点温度に依つ。反応時間は通常 0.5～5 時間を経する。生成物質であるニトリル（化合物 4）はイネオール（化合物 3）に対して過剰好ましくは 1～5 倍量用

-8-

水溶液を用いて反応系が均一系となるようにアルコール、アセトンなどが好ましく用いられる。反応温度は 10～100℃で反応速度を促進するためおよび生成物が安定なことから加熱下に反応を実施することが好ましい。かくしてほぼ定量的に加水分解されて遊離カルボン酸の形の化合物 8 および 9 の混合物が得られるが、この段階で分離精製することなく次の脱炭酸を行なう。この脱炭酸はカルボン酸化合物 8 および 9 の混合物を減圧下に高真空で加熱処理することにより行ひのが好ましい。脱炭酸温度は 200～400℃で好ましくは 250～350℃である。反応時間は生成物の安定性から短時間で処理することが好ましく、通常 5～30 分である。またこの脱炭酸工程では通常の脱炭酸触媒例えばハロゲン化合物などを適宜用いて行なうこともできる。かくして得られた生成物は昇華した状態であるがこれをクロマトグラフィの手法により分離精製され、本発明の目的の新規イソフラボン化合物 1 および 2 が採取される。かくして得られた合成イソフラボンとしての化合物 1 および

-9-

-551-

-10-

2 は天然から得られたものと同一の生理活性を有している。以下実施例について説明する。

実施例 1

(a) 2, 4, 6, 5-アトラヒドロキシ-3, 4-ジメトキシベンゾイン (化合物 3) の合成

イネオール (化合物 3) 1.5 g, ニトリル (化合物 4) 3.0 g を乾燥エチルエーテル 50 ml に溶かし、塩化亜鉛 2 g を加え 100 ml ナス型フラスコ中、室温で攪拌しつつ塩酸ガスを吹き込む。ニトリル層を除き暗赤色の下層を乾燥エーテルで数回洗刷する。その後水 100 ml を加え温水浴上で 1 時間加熱し、冷却する。これをエチルエーテル (100 ml × 5) で抽出する。このエーテル溶液を水洗、乾燥後エーテルを留去すると油状の残渣 2.3 g が得られる。これを Merk, Kieselgel 60 (120 ~ 230 ユ) を充てん剤としてカラムクロマトグラフィーによつて分離精製した。溶剤溶媒としてエーテルを用い、最初の 200 ml からは未知混合物 600 mg を得る。次の 500 ml からは薄層クロマトグラフィー上で単一のスポット

-11-

(120 ~ 230 ユ) を充てん剤としてカラムクロマトグラフィーを行つた。(溶媒はエーテル/ベンゼン/酢酸 1/4/0.1 を 2 回用いた。)

最初の 650 ml からは、三つの未知化合物の混合物を 210 mg, 次の 500 ml からは薄層上で単一のスポットを示す油状物質 519 mg を得た。これは、次に示す MM R データより 2-カルボエトキシイソフラボン異性体の化合物 6 と 7 の混合物である事がわかつた。

MM R

(溶媒 DMF-O-D⁶ TMS 内部標準)

2-カルボエトキシのメチル, 9.00 が中央の c ($J=8\text{Hz}$)

2-カルボエトキシのメチル, 9.02 が中央の c ($J=8\text{Hz}$)

面積比は (9.00) 1 : (9.02) 2, である。

(a) 5, 7, 3'-トリヒドロキシ-6, 4'-ジメトキシイソフラボン (化合物 1) ならびに 5, 7, 3'-トリヒドロキシ-8, 4'-ジメトキシイソフラボン (化合物 2) の合成。

特開昭50-101360(4)

を示す油状物質として所期化合物を 1.6 g を得た。

収率 50% (イネオール換算)

MM R スペクトル (溶媒, CDCl₃ とアセトン, TMS 内部標準)

6.26 8, 2H (-OCH₃)

6.16 8, 2H (-OCH₃)

4.88 c, 1H (C-5, 8)

3.10 ~ 5.33 m, 3H (C-2', 6', 6'')H)

(a) 5, 7, 3'-トリヒドロキシ-6, 4'-ジメトキシ-2-カルボエトキシイソフラボン (化合物 6) ならびに 5, 7, 3'-トリヒドロキシ-8, 4'-ジメトキシ-2-カルボエトキシイソフラボン (化合物 7) の合成

前記の (a) 工程で得たデオキシベンゾイン (化合物 5) 1.5 g, エチルクロログリオキサレート 3.6 g をピリジン 20 ml に溶かし、攪拌しつつ室温に 20 時間放置する。その後酢酸エチル 100 ml を加え溶液を分液漏斗に移し、5 分塩酸水溶液、水で順次洗浄し、芒硝で乾燥後溶液を留去すると残渣 1.6 g を得る。これを Merk, Kieselgel 60

-12-

前記の (a) 工程で得た 2-カルボエトキシイソフラボン (化合物 6 及び 7) の混合物 3.19 g を、5%-硫酸ナトリウム水溶液 9 ml とエチルアルコール 10 ml に溶かし 50 ml ナス型フラスコ中で、攪拌しつつ 10 分間加熱還流する。冷却後溶液を濃硫酸で中和し酢酸エチル 50 ml を加え分液漏斗へ移し溶液を水洗する。芒硝乾燥後溶液を留去して褐色の残渣 300 mg を得る。これはカルボン酸 (6) と (7) の混合物である。これを更に精製せず昇華装置へ移し減圧下 (4 mmHg) 280° ~ 310° で脱炭酸する。反応終了まで 7 分間を要する。昇華物 290 mg を Wako gel B-5F による薄層クロマトグラフィーで分離精製した。

展開溶媒として CHCl₃ / MeOH, 100/1 の混合溶液を用い、4 回展開して下記の 2 つの生成物を得た。毒性の低い生成物は化合物 (i), mp, 175° ~ 177° である。

アセトン、ローヘキササンより再結晶して黄色の結晶 11 mg が得られた。

これの UV, IR, MM R, 質量の各スペクトルは

-13-

-552-

-14-

ータならびに mp. は天然の 5, 7, 3'-トリヒドロキシ-6, 4'-ジメトキシイソフラゴンのそれ等と一致する。

極性の高い生成物は化合物(2) mp. 199°~200°である。ベンゼンより再結晶して黄色い結晶 28 mg が得られた。これの UV, IR, NMR, 質量のスペクトルならびに mp. は天然の 5, 7, 3'-トリヒドロキシ-8, 4'-ジメトキシイソフラゴンのそれ等と一致した。

未変カルボン酸誘導体が 140 mg 回収された。

特開昭50-101300(5)

5. 添附書類の目録

- | | |
|-------------|-----|
| (1) 明 細 書 | 1 通 |
| (2) 図 面 | 1 通 |
| (3) 委 任 状 | 1 通 |
| (4) 願 書 刷 本 | 1 通 |

6. 前記以外の発明者、代理人

(1) 発 明 者

住 所 北海道札幌市南区真駒内曙町1丁目1番
 氏 名 篠 野 自 彦
 住 所 北海道札幌市中央区北2条西20丁目2番2
 氏 名 正 榮
 住 所 東京都品川区東五反田5丁目1番11号
 氏 名 ニューフジマンション02-A
 住 所 竹 内 盛 興

(2) 代 理 人

住 所 東京都港区西新橋1丁目2番9号
 三井物産館内

氏 名 朝 内 忠 夫
 同 所 八 木 恒 茂
 同 所 浜 野 孝 雄
 同 所 森 田 哲 二

昭 56 4. 14 発行

特許法第17条の2の規定による補正の掲載
昭和 49 年特許願第 10092 号 (特開昭
50-101260 号 昭和 50 年 2 月 11 日
発行公開特許公報 50-1014 号掲載) につ
いては特許法第17条の2の規定による補正があつ
たので下記のとおり掲載する。

Int.Cl.	発明 記載	庁内整理番号
C07D311/36		7169 4C
11 A61K 31/35		6408 4C

手続補正書 (自発)

昭和 56 年 2 月 22 日

特許庁長官 殿

1. 事件の表示

昭和 49 年特許願 第 10092 号

2. 発明の名称

新規インフラゲン誘導体の製造法

3. 補正をする者

本件との関係 特許代理人

住 所 東京都品川区上大崎3丁目14番23号

名 称 財団法人東洋化学研究会

4. 代 理 人

〒105 住 所 東京都港区新橋1丁目1番15号
物質ビル別館 電話 (351) 0261

(5645) 氏 名 八 木 田 茂

5. 補正の対象

明細書の発明の詳細な説明の欄

6. 補正の内容

- (1) 明細書第2頁下から第2行の「メタルトランスフェラーゼ」を「メタルトランススエラーゼ」と補正する。
- (2) 同書第3頁第14行の「H2」を「H・B」と補正する。
- (3) 同書第16頁第10行～11行の「好ましい」を「好ましい。」と補正する。
- (4) 同書第12頁第5行の「6.20」を「6.20」と補正する。
- (5) 同書第13頁第2行の「行つた」を「行をつた」と補正する。
- (6) 同書第13頁第11行の「蒸餾」を「蒸餾」と補正する。
- (7) 同書第13頁第12行の「9.00」を「9.00」と補正する。